

原著

# 臨床実習における作業療法学専攻学生の 作業活動の選択と実践

—作業活動学実習との関連性について—

大 瀧 誠, 梶 田 博 之, 中 島 綾,  
中 前 智 通, 森 川 孝 子

神戸学院大学総合リハビリテーション学部  
医療リハビリテーション学科作業療法学専攻

**【要約】** 本学作業療法学専攻学生は、1年次前期から専門科目で作業活動学実習を開始する。4年次では、臨床実習に赴き、担当した症例に対し、機能向上を図るべく機能訓練や作業活動を選択して実践する。本研究は、作業活動学実習を経験した学生が、臨床実習を通じて、担当症例にどのような作業活動を選択・導入し、効果的であったかについてアンケート調査を行った。

本調査の結果、合計39件の回答を得た。学生が選択した活動は、作業活動学実習で経験した作業活動をあまり取り入れていなかった。作業活動工程の使用は、「一部」が最も多かった。また、担当症例以外でも臨床見学し、作業療法プログラムに作業活動が生かされていることを実感していた。作業活動学実習で経験した教授法は、「生かされた」と回答した学生は51%であった。多くの学生から、作業療法プログラムにおいて、「作業活動が必要である」という回答が得られた。

本調査の結果から、学生は、臨床現場で必要とされる作業活動を学びながら、作業活動を行う上で要求される必要な能力を分析し、担当症例の能力と照らし合わせて、適応していくという能力が、学内よりも臨床実習を通じて備わったと推測される。この過程を円滑に経験できるよう、学内実習においても、作業活動を分析する能力を身につけ、作業活動の治療的要素を捉え、将来担当するであろう症例に対して、作業活動を適応する準備を促すということが重要であると思われる。

**キーワード：**作業活動学実習、臨床実習、作業活動

## I はじめに

本学では、1年次前期から専門科目として作業活動学実習が始まり、作業療法ガイドラインの中の、「基礎作業療法学・作業療法の基礎・作業分析」に対して実践することになる。その中で学生は、作業活動学実習Ⅰにて陶芸、絵画、木工のエキスパートを招聘して、プロの技を間近にしながら実践する。それと同時に、作業活動学実習Ⅱとして、まず教員が作業活動の3種目（刺し子、ア

ンデルセン手芸、ビーズ細工）を指導して学生が体験し、学生は各作業活動についてそれぞれ作業活動を分析する。この作業活動を分析することを使用した書式は、図1のような作業活動分析表を用いた。これは、山根[1]、小林、福田[2]らを参考に科目担当教員が話し合いながら作成し、1年次の学生でも使うことができ、かつ学生が主体的に学べるよう、項目や選択肢を工夫したものである。その後、学生が作業活動中の一つの種目を担当して、他の学生に対して実際に作業活



作業活動を分析し、指導法について学習した上で、教えるポイントを各学生自身で検討した後、グループに分かれて各メンバーに作業活動を指導し、その作業活動を通してグループメンバー一人一人を分析するという経験をすることにある。

4年次となると、臨床実習に赴き、担当した症例に対し、学生が立てた目標に向けて機能訓練や作業活動を選択して実践する。しかし、担当症例に適応した作業活動について、学生自身がどのような作業活動を選択し、またその作業活動を用いたことによって担当症例に効果があったと判断したのか、作業活動学実習での経験が臨床実習の中でどのように生かされているのか、等学生がどのように行動したのかが養成校の教員側にはわからない。臨床実習を終了し、学内で臨床実習セミナーにて実践報告するが、学生自身が選択した作業活動等についての効果の有無を明確にせず、作業活動の選択にも疑問を抱いているのではないかと感じることが多い。

本研究は、前述の作業活動学実習を経験した学生が、作業活動学実習での作業活動の経験を踏まえ、臨床実習で担当症例にどのような作業活動を選択・導入して症例の反応を捉え、学生自らが選択した作業活動とその目的に対して効果的であったかを判断しているかについて、アンケート調査を行った。この中で、学生自身の作業活動の選択や実践について、どのような傾向があるのか、作業活動を用いたことにより効果があったと判断したか等について検討した。さらに、これらの結果を受け、今後の学内教育科目の連携や、臨床実習における対象者への作業活動の適応を見据えて、作業活動を分析する能力を向上させるための作業活動学実習の取り組みを検討する。なお、作業活動には、日常生活活動や職業関連活動、福祉用具の使用など、人のさまざまな能力を回復させる作業活動が含まれるが、ここでは、作業活動学実習で経験した作業活動に焦点を当てることにする。

## Ⅱ 対象と方法

対象は、本学部作業療法学専攻4年生のうち、臨床実習（Ⅰ期、Ⅱ期の2期間）を履修した学生35名とした。また、本研究の趣旨と内容を説明し、同意を得て学生にアンケート用紙を配布した。調査期間は、各期臨床実習期間（Ⅰ期：2012年5月～7月、Ⅱ期：8月～10月まで）終了後、学内での臨床実習セミナー時に配布し、約一週間をめぐりに回答するよう依頼した。その結果、合計Ⅰ期21通（身体：14通、精神：6通、発達1通）、Ⅱ期18通（身体：9通、精神7通、発達2通）の総合計39通（身体領域23通、精神領域13通、発達領域3通、回収率55.7%）の回答を得た。回答した学生の構成は、男性9名、女性15名、年齢 $21.9 \pm 1.2$ 歳であった。対象者には、研究の趣旨を文書で説明し、書面にて同意を得た。なお、本研究は、神戸学院大学ヒトを対象とする研究等倫理委員会の承認を得ている（承認番号：HEB111221-3）。

アンケート内容は、図2に示す項目で、これらの各項目に、学生が臨床実習で担当した症例や見学した臨床場面に対して、学生自身が行ってきたことや学んだことについて、多肢選択や自由回答等を依頼した。

このアンケート結果を、以下の4項目に分けて集計し、検討した。その内容は、A：学生が選択した作業活動について；作業活動学実習で行った作業活動の種目を選択したか、その学生が選択した作業活動が担当症例に対して効果的であったか、担当症例に対して学生自身が選択した作業活動の種目は何か、作業活動学実習で作業活動を分析するのに用いた作業活動の諸要素の中でどのような項目であったか、B：作業活動を実施するための準備について、C：学生が見学した作業活動について、D：学内で経験した教授法について；学内で経験した教授法が臨床実習においてどの程度生かされたか、E作業活動の作業療法プログラ

ムとしての必要性について、である。

### Ⅲ 結果

#### A 学生が選択した作業活動について

学生が担当症例に選択した作業活動の種目を、

表1に示す。学生が選んだ作業活動の種目は、「その他」が最も多く、次に「紙細工」と続き、作業活動学実習で行った作業活動の種目を「取り入れなかった」という回答が多かった。この「その他」という選択項目は、学内で経験した作業活動の種目以外ということである。学内で経験した作業活

1.	あなたは、臨床実習Ⅱaの中で、担当させていただいた症例に対して、次の活動を作業療法プログラムに取り入れられましたか？複数回答可。アンデルセン手芸、ビーズ細工、刺し子、紙細工、タイルモザイク、革細工、マクラメ、編み物、陶芸、絵画、木工、その他
2.	<u>1. でその他は</u> 、どのような活動を選択しましたか？それは、担当症例に効果的でしたか？
3.	<u>1. で活動は取り入れなかったのは</u> 、どういった理由からですか？その原因（要素、要因等）を3つ答えてください。
4.	<u>1. で回答した活動は</u> 、担当した症例に効果的でしたか？該当する番号に○印をつけてください。
5.	<u>4. “効果的であった”と答えた活動は</u> 、以下のどの要素が <u>役立ちましたか</u> ？複数回答可。→次に8.へ飛んでください。
6.	<u>4. ②“効果的ではなかった”理由について</u> 、以下のどの要素が該当しますか？複数回答可。→次に8.へ飛んでください。
7.	<u>4. ③“わからない”</u> と回答いただきましたが、どういった点でわからなかったでしょうか？複数回答可。
8.	あなたは、担当症例以外に、 <u>1. 以外の活動を見学し</u> 、作業活動が作業療法プログラムに生かされていることを実感しましたか？実感した活動種目とその目的（わかる範囲で可）を記入ください。複数回答可。
9.	担当症例が実習前より行っていた作業活動以外に、 <u>あなた自身が選択した作業活動は</u> 、どのような活動ですか？活動種目とその目的を記入ください。複数回答可。
10.	<u>9. で回答いただいた活動の目的は</u> 達成されましたか？
11.	<u>あなたが選択した作業活動を実施するために</u> 、あなたはどのような準備をしましたか？
12.	作業活動には、工程（過程）がたくさんありますが、その工程（過程）をどのように作業療法プログラムに使用しましたか？
13.	作業活動学実習Ⅱの中で、教授法を実体験しました。この体験が臨床実習の中で生かされましたか？
14.	どの程度生かされましたか？以下の線に直交するように印を入れてください。
15.	以下のどの要素について、生かされたと思われましたか？
16.	<u>14. 生かされなかった理由は</u> 、どのような理由だからですか？
17.	教授法の必要性はどの程度感じますか？以下の線に直交するように印を入れてください。
18.	臨床実習を通じて、作業活動は、作業療法プログラムの一つとして、必要不可欠であると思えますか？
19.	その必要である（または必要でない）度合いはどの程度であると感じますか？以下の線に直交するように印を入れてください。

図2 アンケートの項目

動の種目を上位順に並べると「紙細工」、「編み物」、「絵画」、「ビーズ細工」、「革細工」、「アンデルセン手芸」であった。「その他」の活動で選択された作業活動の種目は、領域別にみると、身体領域では、「輪入れ」が最も多く、「ボール転がし」、「ちぎり絵」、「セラプラス」が続く。精神領域では、

「塗り絵」が最も多く、「調理」、「園芸」と続く。発達領域では、さまざまな作業活動の種目が選ばれていた。

学内で経験した作業活動を学生の担当症例に取り入れなかった理由は、表2の通りで、全て身体領域での回答であった。その内容は、「病院にな

表1 学生が担当症例に選択した作業活動の種目

身体領域		精神領域		発達領域	
種目	選択数	種目	選択数	種目	選択数
輪入れ	7	紙細工※	4	スタンプ押し	1
ボール転がし	3	編物※	4	ボール入れ	1
ちぎり絵	3	塗り絵	3	塗り絵	1
セラプラス	3	ビーズ細工※	2	積み木	1
紙細工※	3	絵画※	2	型はめ	1
コーン移動	2	調理	2	キーボード	1
ワイピング	2	園芸	2	木琴	1
ビーズ細工※	1	塗り絵	2	絵画※	1
木工※	1	農作業	1		
絵画※	1	裁縫	1		
余暇活動	1	散歩	1		
トイレ動作訓練	1	コーラス	1		
トランプの仕分け	1	休憩	1		
歌唱	1	オセロ	1		
塗り絵	1	喫茶活動	1		
ナンバープレイ	1	茶道	1		
		音楽鑑賞	1		
		ちぎり絵	1		
		革細工※	1		
		アンデルセン手芸※	1		

※印：作業活動学実習で経験した作業活動

表2 学生の担当症例に作業活動を取り入れなかった理由

病院になかった
目的と合わなかった
(学生が)思いつかなかった
取り入れる機会がなかった
治療目的や目標にそぐわなかった
対象者様が機能訓練を好まれた
覚醒レベル低下のため
興奮状態のため
治療時間と患者さんの身体機能を考慮
対象患者が男性で細かな作業を好まなかった
作業動作へ反映させる上肢機能ではなかった
ケースの興味がなかった
(症例の)能力にあってなかった
過去に馴染みがなかった
術直後のため可動域や自動での運動に制限があった
男性で手芸などには馴染みがなかった
病院として活動には取り組む事がない

かった」,「目的と合わなかった」,「(学生が)思いつかなかった」,「取り入れる機会がなかった」,などが挙げられていた。

学生が担当症例に選択した作業活動が「効果的であったか」という問いに対して、「効果的であった」23名(66%),「効果的ではなかった」1名(3%),「わからない」8名(23%),「無回答」3名(8%)であった(図3)。領域別では,担当症例に対して効果的であったという回答の割合が,身体48%,精神69%,発達67%であった。

学生自身が判断した効果的であった作業活動の諸要素について,表3の通りであった。この作業活動の諸要素とは,図1の作業活動分析表の項目(所要時間,環境設定,材料,道具,リスク管理,工程,説明,よく動かした体の部位,よく力を入

れた体の部位,必要な感覚,必要な認知的側面,活動中の気分,うまくするために気をつける点,その他)である。この中で学生が効果的であったと判断した諸要素は,「活動中の気分」,「環境設定」,「所要時間」が多かった。また,効果的ではなかった理由に,身体領域のみ記載があり,「環境設定」,「よく動かした体の部位」,「よく力を入れた体の部位」,「うまくするために気をつける点」の項目が挙げられていた。「わからない」と回答した学生の理由として,領域別にみると,身体領域では,「担当症例には用いていない」,「実施期間が短く効果が得られたかまでみられなかった」,「評価判定が曖昧であった」等が挙げられ,精神領域では,「担当症例が感情表出をあまり出さなかった」,「楽しんでやっていたが幻聴が聞こえて

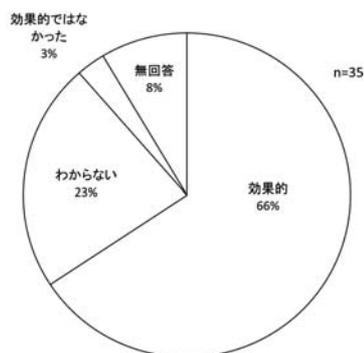


図3 学生が選択した作業活動の効果判定

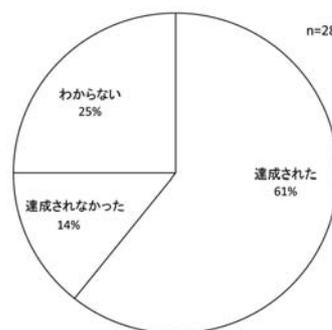


図4 作業活動による目的の達成度

表3 学生が効果的であったと判断した作業活動の諸要素

作業活動の諸要素	身体	精神	発達	合計
活動中の気分	8	8	2	18
環境設定	8	3	1	12
所要時間	7	0	1	8
工程	3	4	0	7
よく動かした体の部位	5	0	2	7
材料	4	2	0	6
よく力を入れた体の部位	4	1	1	6
必要な認知的側面	2	2	1	5
うまくするために気をつける点	2	3	0	5
道具	3	0	1	4
必要な感覚	1	1	1	3
リスク管理	2	0	0	2
説明	2	0	0	2
その他	1	1	0	2

くるとしんどそうだったので担当症例にとって負担になっている可能性もある」,「担当症例がカレンダー作りをしたいと希望し塗り絵でイラストを描いたが特に変化がなかった」等の意見があった。発達領域では,「実際に身体機能に変化があったのか」,という回答があった。

学生が担当症例に対して用いた作業活動によって目的が達成されたかという問いに対して,「達成された」17名(61%),「達成されなかった」4名(14%),「わからない」7名(25%)であった(図4)。

## B 作業活動を実施するための準備について

作業活動を行うにあたって,学生がどのような準備を行ったのかについて,「学生が必要量の材料と道具を準備した」が最も多く(22名,54%),次いで「事前に製作および指導の練習をした」(8名,19%),「既製品と道具を準備した」(7名,17%)

が続いていた(図5)。また,「担当症例に,すべての材料と道具を準備・製作していただいた」という回答はなかった。領域別でも同じようであったが,精神領域において「事前に製作および指導の練習をした」という回答が多く(5名),身体領域(2名)や発達領域(1名)では少なかった。

作業活動の工程について,どのように工程を作業療法プログラムに使用したかという問いに対して,「一部」13名(41%),「全て」11名(34%),「大半」8名(25%)という回答であった(図6)。領域別では,身体が「一部」または「全て」を利用し,精神が「大半」および「全て利用」,発達は「一部」を利用していた。

## C 学生が見学した活動

臨床実習の中で,学生が見学した作業活動を行う症例について,学んだ内容についてまとめた(表4)。

## D 教授法について

臨床実習を通して,作業活動学実習で経験した教授法が生かされたかという問いに対して,「生かされた」20名(51%),「生かされなかった」16名(41%),無回答3名(8%)であった。「生かされた」と答えた学生に対して,どの程度生かされたかということについて,視覚的評価スケール(Visual Analog Scale, 以下VAS)によって評価すると,「生かされた」側から平均3.1cmの地点にマークされていた。領域別では,身体が平均3.4cm,精神が平均2.5cm,発達が平均3.8cmの地点にマークされていた。また,「生かされなかった」と回答した学生の意見として,「担当症例が既知の活動であるため,指導の必要がなかった」(7名),「活動を選択していない」(3名),「学生が担当する前に行っておりそれを継続した」(1名),「担当症例が教えてくれた」(1名),その他,「単純な活動であったため模倣で可能だった」,「教え

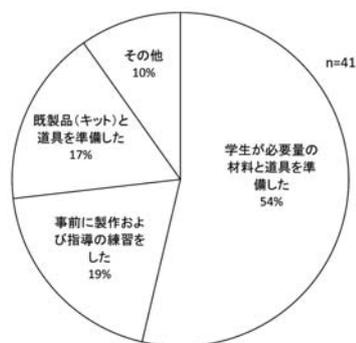


図5 作業活動を行うにあたっての準備の度合い

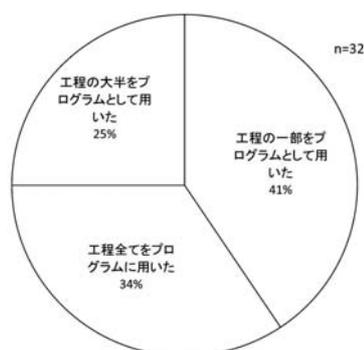


図6 作業活動の工程の使用度

表4 学生が臨床で見学した作業活動とその目的

作業活動	身体領域	目的
アクリルコーン	手指の随意運動、手指の把持経緯と随意性向上	
オセロ	注意を全体に向けて、手指の巧緻性向上	
お手玉入れ	立位バランス、立位保持	
カラーペグ	全体像の把握、図形の認識、注意機能改善、遂行機能の改善	
革細工	自宅での余暇活動の提供、楽しみ、上肢の運動(筋トレ)、気分転換、自信をつける	
キットを用いた立位バスル	構成の理解	
スケーターボード(全腕部をのせてマジックテープで固定し、車輪にて動かす)	運動麻痺がみられる上肢に対して自己他動運動を行い、随意性・分離の向上	
セラプラスト内にビーズを埋め込み取り出す	手指の操作性・筋力向上、感覚入力、ピンチ力向上	
ちぎり絵	両手動作の練習、巧緻性動作の向上・維持	
塗り絵	病室でも行える活動を提供し、活動性を高めるため	
ネット手芸	達成感をもってもらい、簡単な繰り返し作業を行う	
バスル	立位保持の時間に気を紛らわすため、全体像の把握、図形の認識、野菜などの名前の認知	
バランスボール	体幹の筋力向上、前庭覚・固有受容覚への刺激入力	
貼り絵	視覚的や紙を指で挟むことにより感覚情報を入れる	
ビーズアート	気分転換	
ブロック	空間や立体に対する認識を高める	
ペグボード	左半側空間無視や注意力の持続性、注意配分・持続	
ベトボトルのキャップを沢山並べたもの	手指の巧緻性の向上	
ボルト、ナット、ワッシャーを利用したねじ締め外し	巧緻性向上	
神経衰弱	注意を全体に向けて、記憶、手指の巧緻性向上	
生け花	趣味、満足感・達成感、花とふれあうことで生気を受ける	
折り紙	巧緻性向上、簡単にできる、達成感がある(完成品がよい)	
調理	自宅復帰のため	
風船パレー	動的坐位バランスの向上	
編み物	巧緻性、気分転換	
輪入れ	バランスの向上、重心移動	

精神領域	
作業活動	目的
編み物	自分の興味がある作業を行うことでQOL向上、編み物で作品をつくって自分で使える(趣味)
園芸	土を触る事で草を思い出す機会、育てる責任感、成長の楽しみ、汗をかいたり少し疲れたり出来る、育てたものを食べるという達成感を感じられる
カラオケ	リフレッシュ、離下
革細工	余暇活動、達成感を感じるため
喫茶活動	運営側:集団所屬体験、愛他的体験を得る、対人交流の場の提供、客側:対人交流の場の提供、楽しみをもつ
スキルギャラリー	難しい工程がなく、修正しやすい、作成に時間がかかると見栄えがよい
スポーツ	自身の身体変化を感じ身体自我の回復、ストレス発散の機会の提供
調理	グループで1つの料理を完成させ、患者さん同士の交流を促す
陶芸	集中力を高める、心の安定、趣味活動、楽しむ体験
塗り絵	予定を記入できたり日付の確認できる、作業をすることによって集中する時間を作るため、作業へ没頭できる、途中で終了した場合続きをOT室にやりに来るという目的を持てる
ハーベキュー	楽しみ、気分転換、食欲増進
張り子	継続して行える、簡単な作業であり、失敗なく完成でき、達成感を得られる
麻雀	コミュニケーションの良い機会になっていると感じた、仲間作りにいいように感じた
野菜栽培	他者との信頼関係、日中の活動性向上、楽しみ、満足感
音楽(器学)	他者との経験の共有
喫茶経営	集団での所屬意識、他者との協力、仕事への責任、コミュニケーション技能の向上、達成感・満足感・生活リズム
計算	集中して作業に取り組む
折り紙	千羽鶴を折って人に役に立とうとする活動をしていく
短歌	自身の振り返り、気分の安定、他者との交流機会
調理プログラム	計画を立てて行動する、協調性、今後の退院・就労に向けての体力作り、交流、経験を積む、食べることで達成感を直に感じられる(退行要求の充足)
勉強会	集中力、知識の向上、現代社会に目を向ける
発達領域	
作業活動	目的
ボール遊び	その子の楽しめる遊びを見つける、その子の興味を引き出す
貯金箱におもちゃのお金を入れる	お箸操作の獲得(母指～中指を動かして環小指固定)
風船ハレー	上肢を挙上することで、踵に重心を乗せていく
ドミノ倒し	衝動性をコントロールし弱い力でソツと倒す
ハズル	空間認知
キャッチボール	両手で投げることで姿勢の左右差を軽減する

方の技術が身につけていなかった」、「認知機能低下が認められ指示が難しかった」、「担当症例の対応の方法が異なる」等の意見があった。

教授法の必要性は、どの程度感じるかという問いに対して、VASによって評価すると、「必要である」側から平均2.6cmであり、領域別では、身体が平均2.6cm、精神では平均2.1cm、発達では平均5.2cmであった。

#### E 作業活動の作業療法プログラムとしての必要性について

臨床実習を通して、作業活動は作業療法プログラムの一つとして、必要不可欠であると思うかという問いに対して、ほぼ全員が「必要である」と答えていた。その度合いについて、VASによって評価すると、「必要である」側から1.3cmの地点にマークされていた。領域別にみると、身体が平均1.3cm、精神が平均1.2cm、発達が1.6cmであった。

### IV 考察

学生は、臨床実習で対象者の方々と接し、実際に自らが作業活動を適応し実践するという貴重な時間の中で、担当症例の人と共に様々な経験をしている。また、臨床では、様々な症例に対して作業活動が展開されている。学生は、担当症例以外でも臨床見学し、作業療法プログラムに作業活動が生かされていることを実感している。臨床での作業療法実践を見学しながら、臨床実習指導者や他の作業療法士に対して質問したり、学生自らが考え、分析したりしている。また、表4にあるように、同じ作業活動であっても、目的が様々なことも経験しているようである。つまり、臨床実習の学習過程の中で、学生は試行錯誤を繰り返して、作業活動の楽しさや適応の難しさに加え、その意味について思案することを、症例を通して経

験していることがわかった。

この臨床実習の中で、学内で経験した作業活動の種目は、あまり取り入れられていなかった。その理由について、野田ら[4]の調査結果では、「治療手段として適切なものがなかったから」や、「対象者の受けがよくなかったから」が多かった。作業療法白書[5]では、基本的動作訓練(生活に関連する作業を用いない訓練)と日常生活活動が最も多く、社会生活における役割獲得に向けた活動も実施されている。上述の結果と本調査結果(表2)は、おおそ一致しているが、担当症例の症状・状態や嗜好に配慮した結果であろう。それに加え、学生が選択した作業活動が担当症例に「効果的であった作業活動の諸要素」(表3)から、学生は、担当症例の活動中の気分に注目し、作業活動を行うための環境設定を工夫していたことが伺える。この点では、学生自身が、臨床現場で必要とされている作業活動を、臨床現場で学びながら作業活動の適応や作業活動が要求する能力を分析することを経験し、担当症例の能力や嗜好等と照らし合わせて、活動準備を含めて、作業活動を適応していくという能力が、臨床実習を通じて学生に備わったと思われる。古川[6]は、作業を治療として用いる場合は、実際の生活のなかで具体的に役立つ技能の習得を目指して行うが、その場合、クライアントがなぜそれを行うのか目的がわかり、納得して行い、興味がある作業で意欲を駆り立てるような作業を選ぶとしている。単に作業中の気分を向上させるだけではなく、対象者の能力を加味して段階付けながら環境設定を行うことで、小さなチャレンジをステップアップしていくことにより、能力や気分をさらに向上させることができる。学生は、臨床実習において、この一連の流れについて担当症例を通して自身が経験し、自らの設定が適切であったかどうかを判断し、今後の展開を見いだしていくプロセスを経験することが大切であると我々は

考えている。この過程を円滑に経験できるよう、学内実習においても、養成校は、作業活動の種目数を増やすことや臨床で用いられている作業を取り入れるのではなく、作業活動を分析する能力を身につけさせることにより、作業的要素を捉え、将来担当する症例に対する作業活動を分析する能力を駆使し、適応していく準備を促すということが重要であると思われる。これには、進級するに伴い、疾病や障害の程度を評価する能力や、治療的作業設定を行う能力を備えることを見据えた上で、1年次の学生に基本的な作業活動を分析する方法や、人に対して目的をもって作業活動を指導するという経験をすることが必要であることを伺わせる。

また、作業活動を適応しなかった（できなかった）のは、身体領域の施設であった。生活環境や性別、担当症例自身が持っている能力に合わない等の理由に加えて、臨床実習において学生は全期間の2/3以上は医療機関に赴かなければならず、診療報酬の制度変更に伴い、入院期間が短くなる等病院施設が持つ機能と役割に応じて、作業療法を展開しなければならない難しさもある。学生は、こういった事情を踏まえて、作業療法を実施する上で、作業活動の持つ意味や、作業活動の広がりについて、さらに認識しなければならないことを伺わせる。

教授法に関しては、その必要性の有無について、おおよそ半分に意見が分かれていた。前述の実施期間が短いという理由に加え、開講されたのが1年次であり、その内容まで記憶されていないということも考えられる。しかし、VASの結果からは必要性があるとの意見が優勢であった。このことから、多くの学生は、教授法の必要性を感じるが、その内容について見当がつかず、それよりも対象者に経験があり、馴染み深い作業活動を用いることで、気分変容を促しながら目的とする運動・行為の変化や生活の質の向上を求めているように思

われる。つまり、教授するという様々な方法を学生自身が気づけずに埋没してしまい、口頭指示や環境設定など学生が最良と思う作業活動の手段を狭めている可能性もある。その結果、効果判定が曖昧となり、学生自身の目的達成度が低いように思われる。この学生が目的達成感を得るには、自らが立てた計画や実施に対して自己効力感を得ることも重要であろう。小久保〔7〕は、自己効力感とは、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまく行うことができるかという個人の確信であると述べている。Bandura〔8〕は、自己効力感の源泉について、①遂行行動の達成(performance accomplishments)、②代理的経験(vicarious experience)、③言語的説得(verbal persuasion)、④情動的喚起(emotional arousal)の4点を挙げている。楠奥〔9〕の実証研究から、実務に従事したことの無い学生がインターンシップ先の実務で成功したことにより自己効力感が高まり、彼女らがこれまで想像レベルでしか理解できなかったことが、インターンシップを通じて、現実的に理解することができ、自己効力感を阻害する不安を軽減できたことにより自己効力感が高まったと述べている。すなわち、1年次における作業活動学実習で、様々な作業活動の製作方法や作業活動の分析を経験したものの、進級と共に講義や演習等で様々な疾病や障害像とを結びつけて考え実践する経験がまだまだ不十分であったのではないだろうか。この作業活動を行うにあたっての設定を、学生が考え経験する機会(演習)は、3年次後期までの様々な科目において、症例を想定して作業活動を設定する経験を積んでいるものの、実際に担当症例に作業活動を適応・導入する臨床実習となると、学生自身に「これでいいのだろうか」というような不安が先行し、現実的理解までには至らなかった可能性がある。これらのことから、学生が継続して作業活動を適応・導入するにはどのようにすべきかを考えていけるよう、進級に合

わせてさらなる科目間連携を強化し、講義・演習での工夫を模索することが必要であろう。

学生は、作業療法プログラムにおいて、作業活動が必要であるという回答が大勢を占めている。このことから学生は、作業療法が、作業活動を通じて担当症例の能力を改善・維持・向上することを認識し、理解していると推測される。この点においては、学内教育の結果であると思われる。しかし、その実践となると、上述により、様々な難しさが伴っている。西方 [10] は、「手段としての作業」のみから脱却したが「目的としての作業」にはまだ十分に焦点を当てられておらず、「作業」を治療的要素として分析する方法論にあてられているためではないだろうかと述べている。このことから、作業という概念の広がりに対して、学生の視野をいかに広げ、臨床実習に結び付けていくか、科目間連携と共に今後の課題である。

本研究の限界は、対象が本学学生であり、質問項目によってはバイアスがかかっている可能性がある。今後、アンケート内容を再検討し、他の質問紙法を用いながら、学生の本意をしっかりと反映させる必要がある。

## V 謝辞

本論文の作成にあたり、快くご協力頂きました神戸学院大学総合リハビリテーション学部作業療法専攻4回生の諸君に、心より御礼申し上げます。

## 【文献】

- [1] 山根寛 ひとと作業・作業活動 第2版 三輪書店 2005, 208-211
- [2] 小林夏子, 福田恵美子編 基礎作業学 第2版 医学書院 2007, 184-196
- [3] 日本作業療法士協会編 作業 その治療的応用 第1版 協同医書出版 1985, 55-59
- [4] 野田和恵 古川宏 基礎作業学実習の種目調整の必要性について 神大保健紀要 2003, 19, 101-107
- [5] (社)日本作業療法士医協会企画調整委員会編 作業療法白書2010 2012, 25-50
- [6] 古川宏編 作業活動実習マニュアル 医歯薬出版 2012, 2-4
- [7] 小久保みどり 大学生の職業選択・キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向 1998, 37, 1-20
- [8] A. Bandura Self-efficacy. Psychological Review, 1977,84,191-215
- [9] 楠奥繁則 自己効力論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実証研究 立命館経営学 2006, 44, 169-185
- [10] 西方浩一 作業療法士教育において「作業」をいかに伝えるべきか 文京学院大学保健医療技術学部紀要 2008, 1, 53-61

# The selection and clinical practice of the activities of an occupational therapy student in clinical training.

—a relationship with Practice of Occupational Science and Skills—

**Makoto Otaki OT MS, Hiroyuki Kajita OT MS, Aya Nakajima OT MS,  
Toshimichi Nakamae OT MS, Takako Morikawa OT MS**

Kobegakuin University, Faculty of Rehabilitation  
Department of Medical Rehabilitation  
Division of Occupational Therapy

In our university, a specialized subject begins in one annual as Practice of Occupational Science and Skills from the first half year. When a senior is become, a clinical practice is proceeded to, and functional training and work activity are chosen in order to plan functional improvement, and, for a case in charge of, it is practiced. Questionnaire survey was done any kind of activity was chosen for a charge case, and the student who experienced Practice of Occupational Science and Skills transduced it through a clinical practice, and how this study was effective.

As a result, 39 answers in total were got. The activity that a student chose did not take in activity experienced in Practice of Occupational Science and Skills. The use of activity process had most “portions”. In addition, a clinic was observed other than a charge case, and that activity was made use of in an occupational therapy program was realized. The student who replied it when the teaching method experienced in Practice of Occupational Science and Skills was “made use” of was 51%. From many students, the answer “that activity needed” was obtained in an occupational therapy program.

The ability that activity demands is analyzed while learning clinical practice activity required on the site, and a student can be compared with ability of a charge case, and it is supposed that a student was provided with ability adapted itself to through a clinical practice. In training in our university, ability to analyze activity into is worn to be able to experience this process smoothly, and an element of therapeutic activity application is arrested, and it seems that it is important to promote preparations activity adapt itself for the case that we will be in charge of in the future.

**Key Words** : Practice of Occupational Science and Skills, clinical practice, activities